

## 「阿久比の昔話」復刻版（デジタルブック）の発行にあたって



「阿久比の昔話」は、阿久比町制三十周年を記念して昭和五十七年に出版され、阿久比の成り立ちや地名の由来、習慣、そして住む人の温かいなまりや人柄などを感じられる短編の話がまとめられた冊子です。その後、四十年が経過しておりましたが、昨年「住民税1%町民予算枠制度」わくわくアイデア事業として、町民の方から「阿久比の昔話の復刻事業」のご提案をいただきました。

そこで、阿久比町制七十周年を迎えた節目の年に、全ての世代の方々にふるさと「阿久比」への愛着を育み、自分たちの住む町にちなんだ昔話を知ってもらいたいと考え、復刻版を作成する運びとなりました。

この度は、デジタル化が進む時代に合わせ、パソコンやスマートフォンを使って、いつでもどこでも閲覧できるデジタルブックにて復刻いたしました。また、簡単に印刷できる形式にもなっています。ぜひ、ご家庭などでお読みいただき、ふるさと「阿久比」をより身近に感じていただければ幸いです。

最後に、復刻版の作成にあたり、貴重なアイデアを提案いただきました町民の方をはじめ、その他ご協力いただきました多くの方々に感謝申し上げます。

令和六年三月

阿久比町長 田中清高



# 阿久比の昔話

—町制施行30年記念—

阿久比町

## はじめに



「むかし話」なんと人の心に温もりと郷愁にも似た懐かしさを覚える言葉でしょう。

親から子へ、子から孫へと幾世代も語り継がれてきた数々のむかし話のなかから、先人たちのさまざまな姿が浮かびあがってきます。名前はむろん顔も知らないおじいさんやおばあさん、

子供たち、暮らしのありさまとそこに広がる村のたたずまいが――。

猫が日なたぼっこしている縁側で、おばあさんが針仕事をしながら、ぼつり、ぼつりと聞かせてくれた「兎の運んだ仏様」の話、夕涼みの縁台で隣のおじいさんがキセルをポンポンやりながら、思い出したように語ってくれた「唐松の井戸」の話などいろいろ思い出されてきます。

私たちは、四季折々に色彩を変える自然の中に、そして、風物の中にむかし話と自分との出あい、ふれあいの姿を重ねて見ることも、目に見えない縁の中にある自分を感じるのではないのでしょうか。過去と現在、人と人を結ぶ役割がむかし話には備わっていると考えると、今の時世ではじつくりとむかし話を味わう心と時間の余裕も、語り継ぐお年寄りも少なくなってしまったことを本当に残念に思います。

親と子の、しみじみとした対話が少なくなり、親子の断絶が問題になっている今日、む

かし話こそ祖先伝来の心の伝達に役だち親子の心の糧となることと信ずるものです。

むかし話を語り継ぐということは、郷土愛を育くむということではないでしょうか。確かに荒唐無稽な話もあります。全国各地でみうけられる話もあります。でもそこかしこに私たちのふるさと、阿久比町の香りがしみこんでいるように思います。この地方特有の言葉、なまりが伝わってくるではありませんか。どれ一つをとってみても先人が夢をふくらませた私たちの郷土固有なむかし話——阿久比の文化にはありません。

先達の足跡、文化を後世に伝え残すことは行政に課せられた大きな役割の一つです。今般、町制施行三十年を記念し、むかし話を出版することになりました。多くの方々のご協力を仰ぎこれまで埋もれていたむかし話を発掘し、ここに四十三話を収録することができました。

むかし話とふれあうことにより、よりよい人間関係がますます深まるように、また、この冊子を手にした方が語部として活躍くださることを心から祈念してやみません。現在の話題がいつの日か、むかし話となることを願いつつ発刊のことばとします。

昭和五十七年十一月三日

愛知県知多郡阿久比町長

山内 伸夫